

宇宙アタック

一年三組

ブリタ

リオ

「おずずずず」

「寒い日は、ひんやりホッ、トキョコだよね。」

作「てくてて、ふりがと」

僕が、ホットキョコをすりながら、笑顔で

母にそう言ったとき、母は、

「よし砂糖いっぱり入ってるから、毎日はい

だよ、ア、今日は特別ね。」

と笑顔で言った。

「こんこんこん」とたれががバアとたたく

かする。僕は不思議に思い、数秒待って、何

もないや」と、温かいうちに又、ふりむき、

トキョコをすする。すると、今度はまたと

く、「こんこんこん」と聞こえる。

「一体、誰なんだろう。ドマガ壊れるい

いが。」僕は顔をしかめた。勇気を出して、ド

マガを開

「だれなの。」

て	「	た	と	「	し	あ	た	「	悲	た	と	「	で	く	五	陽	入	と
か	待	。	鳴	ハ	く	る	し	ご	しい	か	小	ピ	言	叫	秒	より	っ	叫
わ	っ		い	ア		と		め	い	、	さ	ッ	っ	び	ぐ	も	た	ん
い	て		て	ー		、		ん	に	、	ち	、	た	た	ら	黄	カ	だ
く	い		振	。		や		、	、	、	エ	。	。	か	い	色	ッ	と
鳴	と		り			ン		、	、	、	声		そ	っ	で	い	を	き
い	償		返			ゴ		、	、	、	で		の	た	、	く	サ	僕
た	は		り			ン		、	、	、	い		、	が	、	ち	と	は
の	叫		、			は		、	、	、	た		、	、	、	な	し	驚
	ぶ		下			人		、	、	、	。		、	、	、	の	、	い
	の		を			飼		飼			と		、	、	、	頭	黒	て
	つ		見			え		え			も			、	、	が	と	、
	ン		な			お		い			悲			、	、	一	白	、
	キ		か			っ		、			し			、	、	、	、	、
	、		ら			た		、			、			、	、	、	、	、
	は		来			の		、			、			、	、	、	、	、
	を		い			が		、			、			、	、	、	、	、
	止		行			、		、			、			、	、	、	、	、
	め		っ			悲		い			見			、	、	、	、	、

んと、羊角の着るみを着ていたのだ。中に入っ
 いたのは、緑色の長い耳、大玉い頭と目。着
 ぐるみの中に入っ、ていたのは、何と宇宙人だ
 たのだ。
 人間がペンギン好きでいううおさは本当
 だった。しかし、地球はけっ、つう暗い。
 あれ、この変な四角いものはなんだ。
 宇宙人は目の前のドアを押してみると、す
 と開いた。
 ところで部屋をかくしていたのか。地球人は

結構頭がいい。いよいよ。
 っ、ま、ここに連れてきてくれた男の子の
 がする。
 っ、え、宿題なんて嫌だ。
 今にも鳴きそうだった。宇宙人はすぐにペン
 ギンの着るみに着替えて考えた。っ、シユク
 ダイ、て何だろう。どん、とにひどい、強い生
 き物なんだ。う。飛べるのかな。口があるの
 か。な。シユクダイは怖そう。宇宙人は、地
 球をわっ、っ、けようと、人間が怖がるものを探

しに来ていた。その作戦を考えていたが、朝
 になつていた。バマの「ギギギ」という音
 がすると、男の子が
 「おはよう。」
 と元気なさうに話しかけてきた。
 「ゆうべ、宿題のしで大変だったんだ。」
 そして、顔を赤くし、張り裂けそうで大きな
 声で続けた。
 「こんなにくさんあるなんて、たえられな
 いよ。」

男の子は、持つていたノートを両手で遠くに
 投げつけ、外へ走つてしまつた。とう
 とう、シユクダイに人間がやつつけられてし
 まつたらしい。
 「そうか。」シユクダイは本当にこわかつたの
 か。
 そり、そりと宇宙人は地下から出て、
 持つていたスヌホで他の宇宙人に話しかけた。
 「報告。」シユクダイというのが地球人の弱味
 であつた。

ノ	青	そ	い		を	宇	「	取	大	「	す	弱	「	っ	く	バ	そ	「	そ
ー	い	、	る	地	滅	宙	へ	る	切	空	る	い	地	た	。	タ	し	ク	の
ト	空	笑	に	球	ぼ	人	っ	こ	な	に	と	ら	球	。	宇	バ	て	モ	瞬
を	か	顔	二	上	す	だ	へ	と	情	あ	が	は	人		宙	タ	、	だ	間
た	ら	に	日	に	ぞ	ぞ	っ	が	報	る	で	は	は		人	し	両	。	、
く	宇	な	紐	あ	し	。	。	で	た	る	を	、	ク		は	な	手	小	男
さ	宙	っ	た	る		。	僕	を	な	ぞ	し	モ	モ		び	が	で	布	の
ん	船	た	。	、		よ	ら	。	。	。		ね	と		っ	ら	大	い	子
、	が	。	宇	全		し	は		こ			。	い		く	、	き		の
パ	飛	今	宙	て		シ	、		れ				う		り	大	な		さ
ラ	ん	が	人	の		ユ	地		で				も		し	急	円		け
パ	で	、	は	ノ		ク	球		、				の		な	ぎ	を		び
ラ	ま	そ	、	ー		ダ	を		僕				に		が	で	描		声
と	て	の	高	も		イ	や		ら				も		、	玄	い		が
下	い	と	い	か		と	っ		が				ど		ス	関	て		響
に	空	き	、	き		ク	け		地				う		マ	か	る		い
落	か	だ		集		モ	に		球				や		ホ	ら	め		た
し	ら	。	今	め		で	来		を				ら		に	出	た		。
た			だ	て		地	た		乗						言	い	に		
。						球			っ										

赤、青、黄色、緑、オリーブ、紫と、まるで
 虹のようにたくさんの色があつた。
 「地球め。これでもがし。
 低く叫ぶと、どんなに人が怖がつているのか
 知りたくなつて、嬉しうに、地球のテレビ
 の電源をつけた。画面には、しポーターの人
 が少し驚き、嬉しうに話していた。
 「誰か知りませんか、天がら子供たちのため
 にノートが降つてきていますし。
 宇宙人は、あわててすぐにテレビを消した。

「僕らは地球を助けているのか。滅ぼすはず
 だ。たのに。ままだクモがあるからなし。
 宇宙人は、宇宙船の中で水を温め、雲を作っ
 て空に出した。あまりに急にたくさん雲
 を出したので、雨が降りました。
 「地球よ。これでもがし。
 そう言いながら、テレビちまたつけた。しホ
 ーターは、目を輝かせながら、また喜んでい
 る様子だつた。
 「この三年、雨が降らなかつたので、恵みの

雨に、みんなが喜んでいます。
宇宙人は不思議な顔で、テレビを消した。え、
みんな喜んでいて。地球を助けたの。あ、
あ、地球を滅ぼすには、僕たちには無理だ。
あまらぬようにと宇宙人は言う。宇宙
人みんなは、宇宙船に乗り、
「僕たちも、自分達の住む惑星を大切にしま
すぞ。」
と話しながらいって行った。子供たちは、虹
色のノートを宇宙人に両手で見せながら、
「ありがとう。また来てね。」
と口々にお礼を文子に言っていた。

と	ろ
ろ	あ
々	り
に	が
お	と
礼	う
を	。
又	ま
そ	た
な	来
声	て
で	お
言	し
っ	。
た	
。	

今は昼間なのか夜なんだろうか。目の前は真っ黒。この部屋で感じられるのは薄いシートと氷のように冷えた自分の手だけだ。耳を澄ましてもひたすら静寂が広がる。

半年前の雪のちらつく日に中学校の帰り道で事故にあった。最後に覚えているのはトラックが私に向かってくる映像とその運転手の避けそうなくらい大きな口で叫んでいる顔。病院で気がついたとき私の目は見えなくなっている耳は聞こえなくなっていた。私は盲ろう者になった。死んでいるのだと思った。でも私の体はそこにあるし、おなかもすぐ。その日からずっと病院で一人で何もできず寝込んでいる。誰かが食べ物を口に運んでくれる。何を食べているのかはわからないけど。誰かが私の手を引いて決まった時間にトイレに連れて行ってくれる。私のトイレの時間は毎日違う時間なのけどそれをどう伝えればいいのかわからないので、トイレに行きたくてもぐつとがまんする。母は石鹸のいい匂いがする。そのこのいるのは母だとすぐわかる。だけど毎日来てくれた母も数ヶ月経つとあまり来なくなり、私は一人になることが多くなった。初め見舞いに来てくれていた友達や知り合いの人達（誰なのかは分からなかったけど）も、来なくなった。私はこのままこの暗くて静かで寒い部屋で体が動かなくなるまで暮らすのだろうか。それでもいいと思った。

私には父がいない。私が小さいときに病気でいなくなつた。母は私を育てながら朝から夜中まで働いていた。母は時間ができると得意のアップルケーキを焼いてくれた。その

他にもチーズケーキやチョコレートケーキとか母が作るお菓子はどれも綺麗で美味しかった。母が仕事で家にいない夜でも母のケーキを食べると寂しくなかった。母のお菓子は温かい気持ちしてくれる。私には小さな夢があった。お菓子作りの勉強をして母と小さなかわいいケーキ屋さんを始めることだった。そして、母のケーキで皆の心を温めてあげられたらいいなあ、って。だけど、そんな夢は碎け去った。私は母のために何もできないどころか迷惑にしかなくていい。母が最近私に会いにこれないのは私の入院費を払うために前よりもっとたくさん働いているのだろう。それくらい分かっていゝる。せめて母の負担にならないように、どうか私の存在を消してよ。

ある日、眠ろうとした瞬間、突然私の手の上にずしりとした何かが乗って来た。突然だったのでびっくりして、思わず手を抜いてしまった。おそろおそろまた手を差し出してみると、ふわふわな毛に触れた。ぬいぐるみのような手触りで、とても柔らかい。私の目の前に何か動物がいるのがやっと分かった。とても大きな犬だった。何故ここにいるのかも、どうやって私のところまで来たのかも分からないが、久しぶりにざらざらなシートじゃないものに触れたのが嬉しかった。撫でていたら犬が急に顔に飛びついてきて、私の顔を舐め始めた。

「名前はないのかな。ぬいぐるみみたいだからもふもふって呼んでもいいかな。」

思わず呟いた。いや、以前のように呟いたつもりだけど声に出していたのか分からない。だけど、犬は舐めるのをやめてしまった。

「気に入らなかつたの。じゃあハナはどうかな。私の祖父のチワワの名前がハナだったんだよ。」

そう言つてみた。聞こえてるのかな。そうしたらハナは氣に入つたようにまた顔を舐め始めた。私の言葉はハナには聞こえたようだった。

「よかつた。私の名前はめい、よろしくね。」

ハナはそれからずっと私のそばにいた。どこから来たのか、誰の犬なのか、ご飯はちゃんと食べているのかわからなかつたけど、ハナと一緒にいるのはうれしかつた。あるとき、ハナは急に私のナイトガウンを引つ張つた。散歩に行きたいのかもしれない。どこに行くかも分からないけど私は靴をさがしてはいてみた。そして、ゆつくりとハナに引つ張られるまま病院の外に出ていた。何ヶ月ぶりだろう。生暖かい風が吹いて少し歩いただけで足が疲れて息苦しくなつた。

少し近くの自然の中を歩いたような氣がする。不思議なことにハナに連れて行かれる道を歩いていると何につまづくこともなくて安心して足を前に出すことができる。汗がでるほど暑かつたけど、それが生きているつていう感じがしていた。手に触れる葉っぱや変な形の植物の感覚が気持ちよかつた。すると、頭から小さな滴が落ちてきた。次から次へと落ちてくるしずくは、ナイトガウンもびしょ濡れになつてしまい、だんだん激しく降つてきて体中が水浸しになつていた。そうしていると、どこからともなく懐かしい香りがした。草木の匂いというか大地の香りだった。これはペトリコールだ。

「ペトリコールってね、雨が降り始めるときの匂いなんだよ。」

と母が昔教えてくれたのを思い出した。この空間は、今その匂いがしている。雨に濡れているのに、なぜだろう？ すごく幸せな氣分になつてきた。そうだ、小さいころ、まだ父も元氣だった頃、父と母は雨が降ると私に新しい傘と長靴を履かせてくれて雨の中を三人ではしゃいでいたっけ。突然、ペトリコールとともに私の目の前に鮮やかな映像が浮かんできた。緑の景色の中に雨が地面に弾いて、母と父が私を見つめながら声をあげて笑っている。私は大声をあげて父と母を呼んだ。何度も。私の顔を温かいしずくが流れていった。見えなくても聞こえなくても、私は大切な人を感じる事ができる。

ハナは私のドレスをかんだまま突然走りだした。転びそうになりながらも引つ張られる方に必死に追いかけた。草の間を走り抜けた。走り続けた。体力がない私はすぐに疲れはすなのに、何故か止まりたくなかつた。ハナがやつと走るのを止めた。すると背後から大好きな石鹸の匂いがした。後ろを振り向くと、母の顔が頭の中に浮かび上がった。タオルを頭に乘せて髪の毛をやさしく拭いてくれた。私は母の手をとつて強く握りしめた。とても温かい手だった。

「ごめんなさい。ありがとう。」

そう言つてみた。ちゃんと声になつていただろうか。母は強く私を抱きしめた。

「めい、おかえり。」

そう言つて、泣きながら笑う母の顔が見えた氣がした。そうだ、ラッキーなことに私の心には大切な人達の姿や声がたくさんつまっている。

これは、私が新しい夢を見つけて叶えるまでの物語り。私は、ゆっくりコンピューターから指を離して大きく伸びをする。横で昼寝をしているハナをゆっくりとなであげる。ハナは私の友達でリーダーだ。出会った日以来ずっと私のそばにいて私を導いてくれる。できるなら、病院で目覚めたばかりの私に教えてあげたい。あなたの未来は希望に満ちているって。会話もできるし本を読むこともできる。手のひらに文字を書いて会話をし、点字を学んでからなんでも読むことができる。数年後のあなたはね、点字コンピュータを使って本を書いているんだよって。たくさんの人達があなたの物語を楽しみに待っていてくれる。もうすぐお母さんが新作のりんごケーキを持って帰ってくるよ。楽しみ。少し空いていた窓から温かい風と一緒に雨粒が頬にかかる。

ペトリコールの匂いがする。

出逢いは一瞬に

瀧本 ゆりな

あの日、あの時間、僕は出逢った。

きみはだれ？

ジメジメとした暑い夏の日。学校の帰り道。僕はいつも、百段以上ある長い階段の上にある神社の鳥居の前を通って帰る。その神社から降りてきたのか、鳥居の前にいた僕と同じくらいの背丈に、少しブカブカな黄色の甚平を着ている黄色い目をした男の子と僕は出会った。

「こんなところで何してるの？ どこから来たの？」

地図にも載っていないような小さな田舎なので、ここに住んでいるほぼ全員の顔は知っている。それなのに、僕は今まで見たことのないような男の子に驚きを隠せなかった。引越してきたのかとも思ったが、遊び場もない、あるとすれば神社が畑くらいの場所に引越してくるなんて。

名前なら言えるだろうと聞いても、男の子はニコニコとしていてだけで答えない。だけどなぜか僕はこの男の子と仲良くなれるという確信があった。すると奥から近

所のおばちゃんが僕の名前を呼ぶ声が出て、僕は大きな声で返事をして走り出す。もうすぐ夏祭りがあるので、いつも学校の帰りはその手伝いをしているのだ。宿題をしたくないという気持ちもあるが、純粹に帰りたくないという理由が大きい。僕は一緒に手伝いをするかと聞くために後ろを向くと、もうそこに男の子の姿はなかった。

次の日、また男の子は神社の階段に座りながら、そこから見える景色を眺めていた。僕は会えたことを嬉しく思い、重いランドセルのことなんか忘れて階段を走って登る。

「今から一緒に海に行こうよ！」

いつもは絶対にこんなこと言わないのに、もっと知りたいという気持ち一心で一生懸命話しかけた。男の子は昨日みたいに何も言わなかったが、ニコニコとしながらただ静かに頷いた。その答えに僕は嬉しさを隠せずに眉毛を上げ、目をキラキラと輝かせた。

「ランドセル置いてくるからここで待ってて！」

と、言ってから転びそうなくらい早く走って家に帰り、ランドセルを放り投げて僕は男の子の待つ神社へと再び向かった。約束通り男の子はそこで待っていて、僕たちは二人で近くにある海へと向かった。海では足を入れて

冷たいと言ったり、水を掛け合ったり、蟹を取って美味しそうと涎を垂らしたり、砂の城を作ったりした。遊び尽くした頃にはもう夕日が出ていたが、僕らは帰ろうとせず浜辺に座っていた。帰りたくないな、と独り言をいうと、なぜだと聞くように男の子は首をかしげる。

「だってお母さんって、いつも宿題やりなさいとか友達にできたのかとか、ずっと聞いてくるんだもん。」

きっとお母さんは学校でも一人な僕を知っているながら僕を揶揄って言っているんだ。それに口をひらけばそのことばかり。僕はもう、うんざりだった。

だが男の子は僕の服を引っ張って、僕がいるじゃないかというように自分のことを指差した。僕はそれが嬉しくて、そうだねと返事をした。

次の日もそのまた次の日も男の子は神社の前において、僕たちはずっと遊んだ。山へ行ったり、川で遊んだり、ひまわり畑に行つてかくれんぼをしてみたりと僕たちが思いつく限りのことをやり尽くした。でも男の子は絶対に人前に出ようとせず、僕と二人で遊べるようなことしかしなかった。

出逢ってからちょうど一ヶ月の日、僕は断られると思いがながらも思い切って男の子を夏祭りに誘った。夏祭り

はいつも待ち合わせ場所のように使っている神社でやる、一大イベントだ。男の子は少し渋っていたけど、でも僕はどうしても行きたかったのでお祭りのいいところを出来る限り話した。ちょうど話し終わったときに男の子は自分自身の顔を指差し、次に両手で隠した。出会った当初ならこれが何を指しているのかわからないだろうが、一ヶ月も毎日いれば嫌でもわかってくる。顔を隠したいの？と聞くと、男の子は頷く。

それなら良いものがあると僕は言つて、一週間後にあるお祭りの約束を交わした。

一週間後、村にいる全員が参加するようなお祭りが開催される。みんな長い階段を登り、五十近くある屋台でそれぞれ好きなものを買う。僕は紺色の甚平を着て、一番乗りで神社へと着き、少ないお小遣いで狐の面を買った。そして隠れている男の子に面を渡す。驚くほど面が似合っている男の子。僕たちは初めて人がいっぱいいる場所だと思い切り遊ぶ。射的、輪投げ、金魚掬い、わたあめ、焼きそば、かき氷など、全部の屋台をコンプリートするつもりで周る。そして祭りが終盤に近づく頃、火花が上がる。

「いい場所を知ってるんだ。」

僕はそう言って穴場である神社の裏へと回り、そこで綺麗な夜空に打ち上がる花火を見た。色んな色があつて、色んな形がある。それに見惚れていると、男の子は急に僕の袖を引っ張って僕の手のひらに何かを置く。見てみると、それは光り輝く黄色の石がついたネックレスのようなものだった。だけど高そうなやつではなく、手作りのようなもので、貰っていいの？と聞くと、男の子は嬉しそうに頷く。僕はありがとうとお礼を言つて首からそれを下げた。それを見てどこか寂しそうに、男の子は笑う。

次の日から、僕たちが会うことはなかった。どれだけ待っていても、どれだけ探しても、誰に聞いても、そんな子はいないと言われた。でも、絶対にいたんだ。そのことを示してくれるのは僕の首から下げたある光る石だった。

僕たちが別れた二日後に、いつも通り教室で一人で読書をしていると、クラスのみんなが僕の首にある石に興味を示して話しかけてくれるようになった。そこから遊びに誘ってくれたりしてくれて、僕の毎日は充実し始めた。男の子がくれたものは、魔法の石だったのかもしれない。

僕の村では、狐が神社に祀られている。神様に会えるとか会えないとか。

あの日、あの時間、僕は出逢った。

一瞬の出会い。そして一生忘れない出逢いに。



夢へ

高等部一年二組 佐南凛

幕が上がるときの高揚感。僕はステージの真ん中に立ち、早まる鼓動を収めようと深呼吸をひとつした。顔をあげるとスポットライトはもうすでに僕に当てられていた。みんなの視線が僕に集まっている。観客の視線が全てがステージに立っている僕に浴びせられた。僕が初めて夢見た景色。あの頃には僕がこうなるなんて思ってもいなかっただろう。

中学三年の時、両親に連れられて来た演劇に心を奪われた。そこでは華やかな衣装に身を包んだ役者さんが全力で演技をしている。一言一句全てに感情が込められていて、まるで僕自身が物語の一部になっているかのようなようだった。誰かすら知らない、別人の人生をここまで再現できることに僕は衝撃を受けた。

幼い頃から人見知りな性格だった。一人でいるのが好きで、極力人と接するのを避けていた。そんな僕が

「いつかこうやって舞台に立って大勢の人の前で堂々と演技をしてみたい。」

僕はそんな夢を見るようになった。

高校に上がり、内気な性格のせいで、なかなかクラスに馴染めずにいた。休み時間も僕は自分の机に座ったまま。周りにいる子に声をかけてみようかと努力をするが、立ち上がろうとする頃には鐘がなっていた。周りを見るとだんだん仲の良いグループができ始め、僕の中で焦りが見えてきた。

そんな中、僕はやはりあの劇の感動を忘れることはできず、思うがままに演劇部に入部した。正直、何も考えず勢いで入部してしまったのは後悔した。周りは少なくとも中学から演劇に触れていて、心の底から演劇を楽しんでいる人ばかりだった。それに加えて、部員のほとんどが「『人見知り』なんて言葉を知らずに育ってきたのか」と思うくらい明るかった。僕からしたら全員が太陽のような存在で、小さな部室に太陽が密集しているようなイメージだった。ずっと影に隠れていた僕はその「陽」のエネルギーに耐えられずにいた。

劇を始めるとやはり実力の差にも圧倒された。当然のことだろうが、僕は今年始めたばかりのど素人で分厚い台本を読むだけで精一杯だった。僕が最初の数枚を読んでいるだけで周りにはもう中盤、早い人は終盤の方まで進んでいた。僕は昔から本を読んだりするのが苦手で速く読むなんてもってのほかだった。

顧問は十分ほど僕らに時間をくれた後、
「じゃあまず読み上げるだけでいいから通してやってみようか。誰かやってみたい人いる？」

と言われた時僕はまだ台本の三割ほどしか読んでいなかった。あたふたとページをめくっていたら僕の隣に座っていた子が手を挙げた。

「私がやります。」

僕と同じ時に入部した一年生で、いかにも真面目そうな女の子だった。顧問は、

「じゃあ好きな登場人物選んで自分が思うように読んでみて。」

と言ったあとすぐ、その子は一番台詞の多い登場人物を選んだ。僕はその子が面倒くさそうな人物を選んでくれて少しほっとした。そんなことを考えているうちにその子は立ち上がって一番最初の台詞を読み上げ始めた。

その子はスラスラと台詞を読み進めた。ただ僕の知っている音読のような読み上げ方とは全然違った。息継ぎの仕方、抑揚の付け方、台詞の切り方、何もかもがお手本のような感じだった。目を閉じれば台本に描かれている物語に吸い込まれるような、まるで本当の役者さんが声を当てているような感じだった。物語の中でも長めの台詞だったが、一度もミスすることなく完璧に読み上げた。

その子はさも当然かのように席に着いたが僕はその演技力に唖然としていた。周りからヒソヒソと声が聞こえてきた。僕は耳を少し傾けてその話を聞いてみた。

「ねえあれってあの子じゃない、去年中学の全国大会に出て主役演じてた。」

「高橋真緒だっけ。ちょっと話題になってたよね。でもあのレベルなら全国も納得だよ。」

声だけであそこまでの演技力、素人目から見ても全国に出たと言われても納得だった。顧問も少し間を開けて、

「流石です高橋さん。」

と言っていた。やはり顧問の耳にもこの高橋さんという子のことは入っていたんだろう。初日でこの実力の差を見せつけられて僕は少し心が折れかけていた。

最初の一ヶ月で僕はもう音を上げていた。僕には耐え難いほど周りは常に明るく元気で、初めての部活というのも相まって毎日帰ってきては風呂も入らずにすぐに寝てしまうような生活を送っていた。右も左もわからない僕はとりあえず周りに追いつこうと必死だった。けれど毎回あの活気に満ち満ちている部室を出て帰路に着く度に高橋さんの演技を思い出す。僕よりずっと先に始めたとは言えどやはり同い年だと思うと焦燥感に駆られてしまう。高橋さんは僕よりずっと遠くに居て、彼女の背中を常に追わなきゃいけないと思うと演劇が少し嫌になった。

日に日に部活に行くことが億劫になってきて、「サボろうかな」なんて思い始めた。毎日疲れっぱなしだし、部室に入っても僕とは全然価値観の違う人ばかり。日を重ねるごとに周りとの差が目に見えてくる。部員も頑張ってるから僕もその頑張りに追いつこうともがいて、少し上達しても上にはどんどん上がったりと僕の中でいろんな感情が入り混じり始めた。

あるいつも通りの気怠い朝、僕はふとあの劇のことを思い出した。あの劇を見た時の感動と目指してみたいと思った自分の姿。あのステージの上で注目の光を浴びられたらどれだけ素晴らしいだろうか。「僕もあんな風に堂々と立てたら」という一心で演劇を初めたのに、せっかく新しい自分になりたくて一歩踏み出したのに、こんなところで挫折してしまっているのかな。そう思った瞬間「こんなところで踏みとどまっちゃダメだ」と思った。「夢なんて簡単に掴めるもんじゃないんだ、人生そう甘くない。」僕は自分に言い聞かせて布団から飛び起きた。

そこから目まぐるしい日々が過ぎていった。季節は変わり、葉の色が少しずつ赤く染まり初めた頃、僕にとって一番最初の劇が迫り始めていた。立ち止まっている暇なんてなく、初めたばかりの僕はとにかくずっと駆け足で進んでいたのが功を奏したのか、だいたい部活の雰囲気にも慣れ始めていた。僕はほんの少しだけだが台詞を言う役をもらうことができた。脇役中の脇役だが僕は初めて劇をすると言うことで夢に一歩近づけた気がして嬉しかった。

そして休む暇もなく人生初の舞台に立った。地区の小さな大会だが僕が知らない人が前に立っていると思うと緊張が隠せなかった。「早く終われば良いのに」と言う僕の気持ちとは裏腹に劇はどんどん進み、僕が舞台に立つ時間となった。浴びせられる光は想像以上に明るく、周りがはっきりとよく見える。前を見ると審査員と目が合い、一気に鼓動が早くなって頭が真っ白になった。急に周りが静かになり、僕はただ呆然と立ち尽くしていた。そこから僕の台詞だと言うことに気づき、口を開こうとしたが、僕の口からは何も出なかった。高橋さんが咄嗟に僕のミスのカバーし、事なきを得たが、僕は舞台から出た後、羞恥心からあの場から消えたかった。

きっと僕のミスが大きく影響したのだろう。結局僕の高校は大会で優勝できなかった。僕はずっとあのミスが頭から離れなかった。部員同士の話し合いが終わった後、僕はすぐさま帰ろうとしたが高橋さんが僕を引き止めた。

「ねえ、あのこと気にしてるの？」

高橋さんとは僕は全然話したことはなかった。遠い存在だと思っていたから僕から近づけずにいたが、初めて話しかけられた。

「え。」

急な質問に僕は臆抜けた声が出た。高橋さんは僕が答えるのをしばらく待っていた。僕は今日の失態を思い出し、また恥ずかしくなって黙り込んでしまった。

「私も同じことしたよ。」

僕はその言葉を聞いてハッとした。高橋さんは少し笑って、

「しかも何回もね。」

と言った。そして高橋さんはすぐに

「じゃあまた部活でね。」

と言って先に帰ってしまった。数分も無い会話だったが僕は重要なことを忘れていたことに気が付いた。高橋さんは今でこそあんなに実力のある役者ではあるが、僕みたいな頃もあったのだ。誰も最初から完璧な人なんていなくて、僕が勝手に初めから目標を高くしていただけなんだ。そう思った瞬間、今まで高橋さんの後を追っていたのが急に惨めになってきた。劇への嫌悪感も、高橋さんのあの一言で消えてしまった。僕が演劇部に入った理由は誰かの後を追うことじゃないんだ。演劇で夢ができたから、その夢を掴みにがむしやりに頑張っているんだ。体がふっと軽くなる感覚がして、背筋を少し伸ばして僕はそのまま会場を後にした。

そして季節は巡り、高校最後の春になった。僕はまた舞台の上に立つ。高橋さんとのダブル主演を務めるから台詞も多い。けど高校一年の秋頃の僕と今の僕は全然違う。影に隠れていた僕は演劇で光を見つけた。今僕はその光に辿り着いた。一人が好きで人見知りな僕が今は大勢の人の前で劇をしている。だがやはり幕が上がる前は鼓動が早くなる。ただこの早くなる鼓動は緊張や不安からではなく高揚感からくるものだ。暗い舞台の上に幕の下から光が差し込む。あんなちっぽけだった僕が夢見ていた景色を演劇で自ら掴み取った。今度は演劇で僕が誰かに夢を渡すんだ。

総字数：3712

「溶けるなアイスクリーム」

高校二年二組 杉本彩衣

「うち、再婚したんだ。」

手に持っていたアイスを落とすようになって。だつて、そういえばさあ、なんて軽い口調で切り出された話が、実はそんな重い話だったなんて、一体誰が思う？ という反応をすればいいのかわからず、「へへえ。」なんてぎこちない相槌をする。

「やだなあ、そんな困った顔しないで。」

咄嗟に動揺を隠せない私に、雪乃はくつくつと笑う。私は、何だかばつが悪くなつて、顔をそらした。

「だからね、放課後に寄り道するの、これに最後にしようと思うの。」

再び、アイスを落としそうになる。今度もぎりぎりのところで悲劇は免れたけど、安心が訪れることはなかった。雪乃の親が再婚するから、私たちの時間はこれで最後？ どうして雪乃はそんなことを言うのか。

慌てる私を見ても、今回は雪乃は笑わなかった。いっそ、引つかかったね、今のは冗談だよ、つて笑ってくれたらよかったのに。けれど、雪乃がそんなことをする理由なんてなく、何よりそんな性格ではないことを、私は知っていた。

雪乃は、足元に目を落とす。

「今は家族との時間を大事にしたいんだ。」つまり、雪乃は私との時間よりも、家族との時間を選んだのだ。今までの雪乃を思い返

す。家族連れを見かけるたびに、うらやましそうな目で見ては、家族つていいなあと思ぼしていた。そんな雪乃が、念願の家族との時間を優先するのは、考えてみれば当たり前のことだった。

「よかったね、憧れだつて言っていたもんね。おめでとう。」

口から出た祝福の言葉は、冷たい響きをはらんでいた。けれど、雪乃はそんなことには気づかずに、幸せそうに微笑んだ。

「うん、ありがとう。」

どくん。心臓が嫌な音を立てて、アイスはとうとう地に落ちた。

◇

雪乃のそれは、ないものに対する幻想のように思えた。隣の花が赤かったり、隣の芝生が青かったりするのと同じ。だつて父親がいて、母親がいて、さらに姉がいたつて、必ずしも幸せとは限らない。

「ただいま。」

淡く抱いた期待は、すぐに打ち砕かれことを知っていた。がらんとする家に、私の声と呼吸の音だけが響く。

私の両親は共働きで、年中家を空けていた。歳の離れた姉が家を出て一人暮らしを始めてからは、静けさと比例して孤独感が増した。

雪乃は、よく家族が母親しかいないことを嘆いていたけれど、雪乃から聞くエピソードはいつもあたたかいものだった。この前の連休

に、お母さんとふたりでちっちゃい旅行に行ったんだ。昨日お母さんが作ってくれたシチューがとっても美味しくてね。私には家族旅行の思い出なんてものはなく、夕食だつてもひとり。普通なんてあいまいなもの、信じないほうが幸せだ。

私は、階段を駆け上がり、部屋の扉を乱暴に閉める。そして、余計なことを考えなくて済むように、イヤホンで好きなロックバンドの曲を大音響で流した。

◇

雪乃と過ごす放課後がなくなつてから、一週間が過ぎようとしていた。あれ以来、雪乃とは会っていない。高校生になつてクラスが離れ、放課後くらいしか会うことのなかった私たち。最近、雪乃はホームルームが終つてからすぐに帰宅しているらしく、昇降口で雪乃を見なくなった。私と雪乃、ふたりの時間は、最も簡単に消失したのだ。

「瑞穂、次移動だよ。」

「ちよつと待つて、今行くー！」

私は、教科書とルーズリーフ一枚、それに筆箱を引っ掴んで席を立つ。

「お待たせ、あつちゃん。」

活発な性格のあつちゃんは、高校で一番にできた友達だ。同じロックバンドが好きだと発覚してそれがきっかけで仲良くなった。話しかけてくれたのはあつちゃんだ。それまで雪乃しか話せる相手がいなかった私にとつ

て、あつちゃんの存在は、ありがたく、少しまぶしくもあった。

「昨日上がった新曲、もう聞いた？」

「えつ、うそ、そんなの出た!？」

「出てた出てた、めちゃくちゃ良かったよ。あれは聞かないと損。」

「うわあ、聞きたい!」

雪乃は、ロックを聞かない。だから、雪乃とはこんな話ができない。私は、あつちゃんと過ごすとき、ほんの少しのうしろめたさを感じている。

廊下に出ると、クラスメートと談笑する雪乃の姿が目に入った。知らない人たちに囲まれている雪乃は、なんだか私の知っている雪乃ではないような気がして、何ともいえない気持ちの悪さに襲われた。

「あ!」

突然の大きな声に心臓が跳ねる。何事かと思つて振り向くと、あつちゃんは爛々と瞳を輝かせていた。

「そういえばさ、今日、久々に部活オフの日なんだよね。」

あつちゃんは中学からバレーをやつていて、高校でもバレー部に入つたのだと、仲良くなつた日に聞いた。あつちゃんから聞かされる練習内容は地獄のようなものだったけれど、本人はそれを苦に思つてもいないらしい。昔から運動はからつきし苦手な私にとつて、彼女のたくましさはうらやましい限りだった。

「有名なアイスクリームのお店、駅前に新しくオープンしたんだつて。今日部活のみんなで行つてみようつて話になったんだけど、良かったら瑞穂も行かない？」

「アイスクリーム……」

あつちゃんの提案は魅力的だった。家に帰つても、楽しいことなんてひとつもない。あつちゃんといたほうが、きつと寂しさも紛れるだろう。

不意に、雪乃が脳をよぎつた。雪乃と最後に話した日からそう時間は経つていないはずなのに、雪乃と食べたアイスの味が思い出せない。

雪乃は、私がいなくても幸せそうだった。私がひとりでいるとき、雪乃は新しい家族と楽しく過ごしているのだろうと思うと、ふつと嫌な感情が湧き上がる。

「……うん、行くかな。」

「えつ、うそ、珍しい!駄目元で誘つてみてよかつた、きつとみんな喜ぶよ!」

嬉しそうに笑うあつちゃんに、ずきりと心が痛んだ。

◇

あつちゃんの部活仲間は、あつちゃんに似ていて、みんな気さくでいい人だった。けれど、私以外顔見知りという状況は、どうしても居心地が悪い。

店の前は、私たちと同じようにうわさを聞きつけたであろう学生たちでにぎわつてい

た。アイスを買つた私たちは、近くの広場へと向かうことにした。

「瑞穂と一緒にどこか行くの、初めてだね。瑞穂つてば、誘つてもなかなか遊んでくれないから。」

誰とも話さずにぼつんとひとりでいる私を見兼ねたあつちゃんが、他の子との会話を切り上げて私のほうへ寄つてきてくれる。私は、あつちゃんの友達に申し訳なくなつて、あはは、とあいまいに笑つた。

あつちゃんは、ときどき放課後に一緒に遊ばないかと誘つてくれていた。私は、それらをすべて断つていた。放課後は雪乃との時間だったから。雪乃とあつちゃんに優先順位をつけているつもりはないけれど、付き合いが長い分、天秤はいつも雪乃のほうに傾いていた。

けれども、今、雪乃は私のところにいる。雪乃は私よりも家族を優先したから。だから、私があつちゃんと一緒に遊んでも、何の問題もないはずなのだ。それなのに、

「今日は大丈夫だったの?」

あつちゃんが不思議そうに聞く。胸がきしむ音がする。

「……うん。」

口寂しくなつた私は、アイスをひとくち、口に含んでみる。くどいくらいの甘さは、いつまでも口の中に残つていた。

◇

あつちゃんと別れ、帰路につく。雪乃と食べたアイスの店は、ちょうど帰り道にあった。寄つていこうかな。さつきアイスを食べたばかりなのに？少し、少し覗くだけ。なんて、心の中で、自分に言い訳して。

私は、足を止めた。そこに見慣れた姿があったから。雪乃だ、と脳が理解するまでに数秒かかった。雪乃だ。雪乃。どうしてここに。顔を上げた雪乃と目が合った。彼女は私と鉢合わせするとは思つていなかったのか、しばらく目を丸くしてから、

「見られちゃった。」

と、恥ずかしそうに笑った。

鈍器で頭を殴られたみたいなの、にぶい衝撃に襲われる。だって、幸せだと思つていたの。雪乃は、私なんていなくても、私の知らないところで、幸せなんだと思つていたの。ねえ、雪乃……幸せなんじゃなかったの。

私たちはアイスを買つて、いつもの公園に移動した。歩いているとき、私たちは何も話さなかった。ベンチに座つて、アイスをひとつくちかじつて。そこまでして、ようやく、私たち二人の時間に戻つたような気がした。雪乃がぼつりぼつりと、言葉を紡ぎ始める。

「……家をね、飛び出してきたの。なんだか、息苦しくなつちやつて。」

新しいお父さんとうまく行かないこと。お母さんが、前みたいに笑わなくなつたこと。雪乃は、アイスのカップを握りしめながら、いろいろなことを語つた。声は震えているくせ

に、今にも泣いてしまいそうな顔をしているくせに、彼女の頬が濡れることはなかった。「おかしいよね、あんなに懂れていたのに。いざ手に入つたら思つてたのと違つたなんて、わがままだよ。」

雪乃は、口元を歪めて笑つた。なんで相談してくれなかったの。こんなときまで笑わないでよ。色々な感情が、ぐちゃぐちゃに溶け合つては、吐き出し方もわからずに心の中でうずいた。

「でね、色々考えているうちに、瑞穂ちゃんたちが、駅前のアイスを食べにいらつて言つてたのを思い出して。アイス食べたいなあつて思つて。」

「えつ。」

私は目を見開いた。だって、まさか聞かれているとは思わなかったから。あのとき雪乃のことを考えていたのは、私だけかと思つていたから。雪乃も、私と同じ。雪乃の中に、ちゃんと私はいたのだ。

「……私、雪乃と食べるアイスのほうが好きだよ。」

「本当！？駅前のアイスじゃなくて？」

「うん。」

「そっかあ。ふふ、私と食べるほうが好きかあ。」

雪乃は笑う。私の醜い感情なんて、知らないような顔で笑う。知らないなんてずるいとも思うし、知らないままでいいかとも思う。

ねえ、雪乃。今日は、少し遠回りして帰ろう。それで、一週間分の隙間を丁寧に埋めたら、明日からまた寄り道して帰ろう。すっかり溶けたアイスを一気に飲み干した。優しい甘さは、心にぽっかりと空いた空洞を満たしてくれたような気がした。